

## 6.2 人とのふれあい

### 6.2.1 評価に用いた資料

評価のために収集・整理した資料は次のとおりです。

#### 【散策路・展望地点の分布】

- ・湘南ひらつかやすらぎ回廊
- ・関東ふれあいの道（首都圏自然歩道）
- ・平塚八景



湘南ひらつかやすらぎ回廊  
2005年7月21日撮影

#### 【自然とのふれあい場所の分布】

- ・自然観察場所  
（自然環境調査市民応援団などへのアンケート調査の結果）
- ・自然体験フィールド  
（里山をよみがえらせる会、平塚の自然を守る会からの聞きとり）
- ・自然とのふれあい施設  
（土屋霊園、愛宕山公園、びわ青少年の家）

### 6.2.2 調査の結果

#### 【散策路・展望地点の分布】

西部丘陵地域には、平塚市が選定した『湘南ひらつかやすらぎ回廊』のうち4つのコースがあり、環境省などが制定した『関東ふれあいの道』の鷹取山から土屋地区に至る「鷹取山・里のみち」にも選定されています。地域内のほとんどの小地区は、これらの散策路が通過しており、案内板やベンチなどが整備されています。

展望地点は、『平塚八景』のうち「七国峠、遠藤原」、「霧降りの滝、松岩寺」の2箇所4地点が選ばれています。土屋地区では、市の最西端に位置し、かつては甲斐、駿河、伊豆、相模、安房、上総、武蔵の七国が一望できたといわれる七国峠と、初夏にツツジやリンドウの花が咲き乱れる遠藤原が、良好な展望地点です。また、吉沢地区の「霧降りの滝、松岩寺」周辺も見どころとなっていて、高台からは江ノ島や三浦半島などが眺望できます。



霧降りの滝  
2004年4月8日撮影



遠藤原からの眺望（平塚八景）  
2005年9月17日撮影



七国峠（平塚八景）  
2005年7月21日撮影

\*11 薪炭：たきぎと炭のこと。または、燃料一般を指す。

## 【自然とのふれあい場所の分布】

西部丘陵地域では、「里山をよみがえらせる会」や「平塚の自然を守る会」をはじめとした市民団体が自然体験活動や自然観察を行っています。自然体験のフィールドは、座禅川周辺の源水や、三笠川周辺など一定の広さをもった雑木林です。自然観察のエリアやルートは、下吉沢地区では鷹取山から松岩寺に至る山麓の広大な樹林、土屋地区では座禅川周辺の田畑、琵琶周辺、愛宕山周辺、土屋霊園周辺の樹林などです。

本地域は市街化調整区域であるため、都市公園は少なく、自然とのふれあい施設としてはサクラで有名な愛宕山公園や土屋霊園、青少年施設のびわ青少年の家があげられます。



自然体験フィールド  
2005年7月21日撮影



自然観察場所  
2005年6月5日撮影



土屋霊園  
2005年4月28日撮影

### 雑木林の管理と「ぼく」

雑木林は、薪炭<sup>\*11</sup>（しんたん）、有機物肥料を得る場として、昔から地域の人びとに利用されながら、明るくきれいな林の状態で維持されてきました。しかし、1970年頃から、石油や電気の普及に伴って利用が行われなくなりました。

このようなことから、多くの雑木林ではササが密生した暗い林に変容しています。

かつて農家では、冬になると薪（まき）の材料にするためにクヌギやコナラを伐採していました。伐採された木は、切り株から新芽を出して成長し、12年～15年ほど経つと再び薪に適した太さになります。これを再び伐採するという作業が、何百年ものあいだ繰り返されてきました。

伐採を繰り返すと、切り株が太く、いびつに成長します。これを「ぼく（老木）」と呼んでいました。

「ぼく」は、大きなものは、高さ2m、直径1m～2mにも達するものもあり、子どもたちにとってカブトムシやクワガタが集まる魅力的な遊び場でした。

この「ぼく」は自然とかがわりながら生きてきた地域の文化遺産となるものであり、後世まで残したいものです。

現在では、雑木林にはササが密生して暗く、林外からはほとんどみることができませんが、林の中に分け入れば、密やかにたたずんでいる「ぼく」を見つけることができるでしょう。



「ぼく」

# ■ 散策路、自然とのふれあい施設など 分布図



